

J.S. バッハ作曲「二声インヴェンション」の楽曲分析と演奏解釈

第12番 イ長調 BWV 783

藤 本 逸 子








はじめに

この小論に先立ち、「J. S. バッハ作曲『二声インヴェンション』¹⁾の楽曲分析と演奏解釈²⁾と題し、「第1番 八長調 BWV³⁾ 772」から、「第11番 ト短長 BWV 782」までの11曲を、「豊橋短期大学研究紀要 第2号」から、「同第12号」の各号にそれぞれ、楽曲分析し、演奏解釈した。この小論も、それらと同じ観点にたって、「第12番 イ長調 BWV 783」を、取り上げたものである。

楽曲分析と演奏解釈

「W. F. バッハのための小曲集」⁴⁾(以下「Kb. für W. F. B.」)において、この「Inventio 12」にあたるのは、40番めの曲で、「Praeambulum 9」(BWV 783)と題されている。両者には、表のような違いがみられる。それらは、装飾音とアルペジオ構成音などの小さな違いである。

表 「Inventio 12」と「Praeambulum 9」の相違箇所

	Inventio 12	Praeambulum 9
① ⁵⁾ 上声7拍め	H音 ⁶⁾ 上に 	同に 
② 下声3拍め	Gis音	H音
③ 上声3拍め	E音Dis音	E音D音
③ 下声4拍め	E音上なし	同に 
③ 下声7拍め	Fis音上に 	同に 
④ 上声3拍め	Dis音	A音
⑤ 上声4拍め	E音上なし	同に 
⑥ 上声1拍め	D音上なし	同に 

1) 「二声インヴェンション」という呼び名については、豊橋短期大学研究紀要第2号「J. S. バッハ作曲『二声インヴェンション』の楽曲分析と演奏解釈」藤本逸子1985年(以下「第2号における小論」)の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

2) 作品名・書名・強調語句は、原則として「」に入れて表わす。

3) BWV=Bach-Werke-Vergleichnis, W. シュミターによるJ. S. バッハ作品総目録番号。

4) 「W. F. バッハのための小曲集」については、「第2号における小論」の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。

5) 小節数は、数字を で囲むことによって表わす。例、第4小節め ④、第3小節めから第10小節め ③~⑩

6) 音名は、原則としてドイツ音名で表わす。例、変口音 B音、嬰へ音 Fis音。

	Inventio 12	Praeambulum 9
6 上声4拍め	D音上なし	同に
9 上声7拍め	Gis音上に	同に
10 下声3拍め	Eis音	H音
11 下声1拍め	Cis音上なし	同に
11 下声4拍め	Cis音上なし	同に
11 下声7拍め	Dis音上なし	同に
18 上声6拍め	A音Fis音	A音Cis音
18 下声4拍め	A音上なし	同に
18 下声7拍め	H音上に	同に
19 上声4拍め	Fis音E音にスラー	同なし
19 上声7拍め	Fis音E音にスラー	同なし
19 上声10拍め	E音D音にスラー	同なし
20 上声1拍め	D音Cis音にスラー	同なし
20 下声4拍め	D音上に	同に
20 下声7拍め	D音上に	同に
21	終止線上に	同なし

楽 曲 分 析 (譜⁷⁾参照)

この曲は、二つの部分からなり、それぞれの部分は、次のような構成になっている。

第1部	1~8 (8)	第2部	9~21 (13)
主題の提示	1~4 (4)	主 題	9~14 (5.5)
間 奏	5~6 (2)	間 奏	14~16 (2)
間 奏	7~8 (2)	間 奏	16~17 (1.5)
		終 止	18~21 (4)

各部分における楽曲分析

第 1 部

主題の提示

- 1~4・1~2 上声部に主題(T)が現われる。(T)は、保続する音を要素とする(A)と、順次進行を要素とする(B)と、アルペジオを要素とする(C)からなっている。
- ・(A)は、前半の四分音符と八分音符のリズムで刻む(a)と、後半の付点二分音符で音を保持する(a)で、できている。
 - ・(B)は、順次3度下り、順次4度上がる(b)と、2度下上し、3度跳躍上行した後、順次3度下りる(b)で、できている。
 - ・(C)は、アルペジオ(c)二つで、できている。この(C)は、他の主題では変化を加えられて出現している。

7) この小論における「Inventio 12」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1972)を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許可を得て、全音楽譜出版社が、印刷出版している。

- ・ [1] ~ [2] 下声部は、対旋律 (G) である。この (G) は、(b) の反行形 (q) 二つ、(c) の変形 (c) 二つ、(c) の拡大形 (c x)、(b) の拡大形 (b x) からなっている。
- ・ [3] ~ [4] は、A dur⁸⁾ から E dur へ転調し、上声部と下声部を入れ替えて、(T) と (G) を置いている。
- ・ 上声部の (G) は、出だしの (q) が、2度上行5度下行と変化している (q)。また、(c x) の後は、(c) が二つ置かれ、[2] の下声部と異なる処理がされている。
- ・ [3] ~ [4] 下声部 (T) は、(C) の部分の和音進行を 2 とは変え、5 で、E dur から A dur に戻るようになっている。

間奏

- [5] ~ [6] ・ [5] 上声部は、(a) と (c) を組み合わせ、A dur の $\dot{1}$ ⁹⁾ を響かせている。
- ・ [6] 上声部は [5] 上声部と同じ動きを A dur の $\dot{1}$ で、ゼクエンツ的に行っている。
- ・ [5] 下声部は、(b) と (c x) の組み合わせで、上声部の (a) と (c) に対している。
- ・ [6] 下声部は [5] 下声部に準じているが、次の間奏に、A dur で入るために、A dur 属音である E 音に、10 拍めから、留まる形になっている。

間奏

- [7] ~ [8] ・ [7] ~ [8] にかけて、A dur から fis moll に転調のために、上声部と下声部は、(c) 要素を使って、あたかも掛け合いのような形でアルペジオを鳴らしている。
- ・ [8] 上声部は、アルペジオ (c) の動きの後、(b) の変形 (b) を二つ置き、なだらかに第 2 部の最初の Fis 音につながっている。
- ・ [8] 下声部は、アルペジオ (c) のまま、第 1 部を終わらせている。
- ・ 第 1 部の終わりは、明瞭なカデンツを持つことなく、第 2 部に滑り込むような形になっている。

第 2 部

主題の提示

- [9] ~ [12] ・ [9] ~ [10] 上声部に fis moll で、主題が現れる。(a) が 1 オクターブと 4 度で刻まれる形に変化している (a)。
- ・ [9] ~ [10] 下声部は、fis moll で、(G) を奏でている。[9] の形は、[3] 上声部と同じであり、[10] は、Fis 音にいったん納めた後、cis moll 構成音を八分音符で刻んでいる。
- ・ [11] は、cis moll で、[3] に準じたことを行っている。
- ・ [12] の出だしは、[4] に準じた動きをしているが、他の (T)(G) と異なり、小節半ばにして、間奏に移行する形になっている。

間奏

- [12] ~ [14] ・ [12] ~ [14] は、両声部とも、(c) の要素のアルペジオを置き、cis moll から、A dur に転調すべき和音を並べている。

間奏

- [14] ~ [16] ・ (T) を凝縮させた形で、間奏を作っている。
- ・ [16] の上声部は (a)、下声部は (b) を置いている。

8) 調名は、原則として、ドイツ音名を用い、ドイツ音名の大文字は長調、小文字は短調を表す。例、八長調 C dur あるいは C:、イ短調 a moll あるいは a:。

9) 和音記号の和音の音度は、大きい字体のローマ数字 (音度記号) で表わし、和音の形体は、アラビア数字 (形体指数) で表わす。例、一度の和音 $\dot{1}$ 、属七の和音 $\dot{1}7$ 。

譜1 「Inventio 12」 BWV 783 [1] ~ [21] (楽譜分析)

第1部 主題の提示

The musical score is presented in two systems, each with a treble and bass clef. The key signature is G major (one sharp) and the time signature is 12/8. The first system (measures 1-3) is marked with a box containing the number '1'. The treble clef contains a melodic line with notes G4, A4, B4, C5, and a fermata over C5. The bass clef contains a rhythmic accompaniment of eighth notes. Dynamics include *q* and *a*. The second system (measures 4-6) is marked with a box containing the number '2'. It features a more complex rhythmic pattern in the treble and bass. Dynamics include *b*, *c*, *c'*, *q'*, and *q*. Performance instructions include 'A: → E' and '間奏' (interlude). The third system (measures 7-9) is marked with a box containing the number '4'. It continues the rhythmic pattern with dynamics *c*, *b'*, *c*, *c'*, *q*, and *q*. Performance instructions include 'E: → A:' and '間奏'. The fourth system (measures 10-12) is marked with a box containing the number '6'. It features a melodic line in the treble with notes G4, A4, B4, C5, and a fermata over C5. Dynamics include *a*, *q*, and *c*. Performance instructions include 'A: → fis:' and '間奏'. The fifth system (measures 13-15) is marked with a box containing the number '8'. It features a melodic line in the treble with notes G4, A4, B4, C5, and a fermata over C5. Dynamics include *q'* and *q*. Performance instructions include 'fis:' and '第2部 主題の提示'. The score concludes with a final measure marked with a box containing the number '21' and a fermata over C5. The bass clef contains a rhythmic accompaniment of eighth notes. Dynamics include *c* and *G*.

10 G

fis: → cis:

12 T

間奏

cis: → A:

14 間奏

間奏

A: → D:

16 間奏

間奏

D: → A:

18 終止

終止

A:

20 K

K

A:

- ・ [15] 上声部前半は (b), 下声部前半は (c) が置かれている .
- ・ [15] 後半 ~ [16] 前半は, [14] 後半 ~ [15] 後半に, 準じた動きをし, A dur から D dur に転調している .

間奏

- [16] ~ [17] ・ (c) のアルペジオを下声部, 上声部と交互に置き, D dur から A dur に転調している .

終止





- [18] ~ [24] ・ [18] ~ [19] 下声部は, (T) を置いている . ただし, [19] 後半は, (c) を置くことなく, (b) の要素のまま処理されている .
- ・ [18] ~ [19] 上声部は, 下声部 (T) に対して, (G) を置かず, すべて (c) の要素で相対している . [19] 上声部は, (c) の拡大形 (cx) である .
- ・ [20] の下声部は, (b) の後, (a) を置き, この曲最後の (T) の断片を聞かせている .
- ・ [20] 上声部は, (cx) の後, (b) (c) (c) と置き, 下声部の (T) の断片に対している .
- ・ [21] 上声部は, (cx) の後, カデンツ (K) に入り, A 音で曲を終わらせている .
- ・ [21] 下声部は, (b) を2つ置いた後, (K) に入り, 上声部同様, A 音で曲を締めている .

演奏解釈 (譜2参照)

テンポ

テンポに関して, 諸校訂版¹⁰⁾は, 表 のような指示をしている .

表 諸校訂版における「Inventio 12」のテンポに関する指示

校訂者	テンポに関する指示
Hans Bieshoff	Vivace  =76
Ferruccio Busoni	Allegro vivace e brioso
Alfredo Casella	Allegro vivace e giocoso
S. A. Durand	Allegro giocoso
Edwin Fischer	Molto Allegro
Vilém Kurz	Allegro con brio
Gin Enrico Moroni	Vivace  =80
Bruno Mugellini	Allegro con brio  =72
Julius Rötgen	vivace  =66
John Thompson	Allegro giocoso

また, 内外10人の演奏時間¹⁰⁾は, 表 のとおりである .

10) 各校訂版及び, 各CDの出版については, 本小論の「参考文献・参考楽譜・参考CD」の項を参照のこと .

表 諸演奏家における「Inventio 12」の演奏時間

演奏者	録音年	楽器	演奏時間
Aldo Ciccolini	不明	ピアノ	1 16
Christoph Eschenbach	1974年	ピアノ	1 07
Glenn Gould	1963~64年	ピアノ	0 56
Tatyana Nikolayeva	1977年	ピアノ	1 40
András Schiff	1982~83年	ピアノ	1 09
高橋 悠治	1977~78年	ピアノ	1 20
田村 宏	不明	ピアノ	1 12
Kenneth Gilbert	1984年	チェンバロ	1 44
Gustav Leonhardt	1974年	チェンバロ	1 27
Helmut Walcha	1961年	チェンバロ	1 20
Don Dorsey	1985年	シンセサイザー	1 03

筆者は、「Allegro vivo ♩=80」というテンポをとる。明るく軽やかに演奏したい。

アーティキュレーション

原則的に十六分音符は legato, その他の音符は ten. のついた non legato とする。区切りを感じるところは (|), プレスがほしいところは (√) で示した。

装飾音

原則的には、楽譜の指示どおりとする。ただし、音形と装飾音を統一させるため1部変更しているところもある。個々の装飾音については、解釈譜に小音符で示した。

各部分における演奏解釈

- ①~②・① 上声 (T) は, mp で奏でる。上声の ♩ ♩ ♩ のリズムを充分意識し, 次に続く ♩ をトリルで刻むことによって cresc. する。
- ・ ② 上声は, 7 拍めの cis 音にいったん dim. で (T) を納める。次のアルペジオは, ③ の (G) への橋渡しとして, 軽くつなぐ。
 - ・ ① 下声は, 3 拍ずつの塊で, 少し dim. する。
 - ・ ② 下声は, 7 拍めの A 音に軽く納める。
- ③~④・③ は, ① の上声・下声を入れ替えた形であるが, (T) は, ①~② より太い線で表わす。
- ・ ④ 上声は, ② と違い, 10 拍めの E 音に納める。
 - ・ ④ 下声も, 10 拍めの Gis 音にいったん納める。その後のアルペジオは, 軽く ⑤ の Cis 音につなげる。
- ⑤~⑥・ ♩ ♩ ♩ の (T) の断片を mf で表わし, その他を mp で表わし, (T) の断片を受ける形にする。
- ⑦~⑧・⑧ 6 拍めまでは, 下声 mf, 上声 mp で, 問と答のような会話をさせる。
- ・ ⑧ 7 拍めから, 第 1 部の終りとして, 少し, dim. し, ⑨ 1 拍めに納める。
- ⑨~⑩・⑨ 上声の (T) は, mp で奏でる。八分音符は, 単に ♩ ♩ ♩ とするのではなく, ♩ ♩ ♩ を意識した刻みとする。
- ・ 細かいダイナミックは, ① に準じる。

譜2 「Inventio 12」 BWV 783 [1] ~ [21] (演奏解釈)

[1]    Tのクライマックス



mp

[2]   第1部のクライマックス




mf

[4]   *mf* *mp*





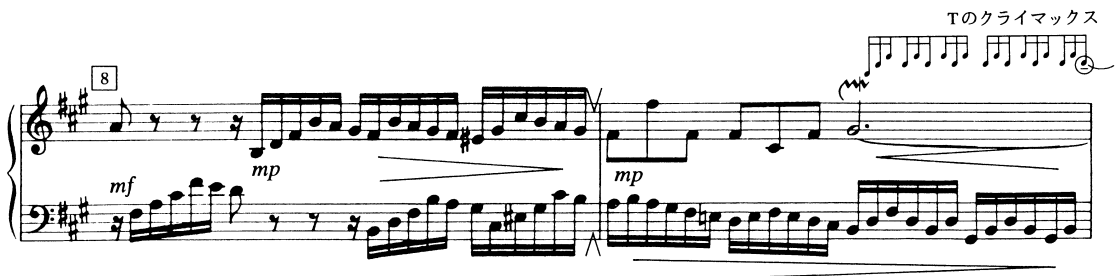
mf *mp*

[6]   *mf* *mp* *mf* *mp*



mf *mp* *mf* *mp*

[8]   Tのクライマックス



mf *mp* *mp*

10

mf

Tのクライマックス

12

f *mf* *mp*

14

p *mf* *mp* *mf*

16

mp *mf* *mp* *mf* *mp* *mf* *mp*

18

mf

全曲最大のクライマックス

20

f *rit.*

少しテンポをゆるめる

- ・ [10] 上声は、7拍めのA音にいったん納める。続くアルペジオは、[2] 上声に準じ、[11] につなげる。
- ・ [10] 下声は、7拍めのFis音にいったん納め、上声同様 [11] に軽くつなげる。
- [11] ~ [12] ・ [11] は、[3] に準じる。
- ・ [12] 上声は、7拍めCis音にcresc. で納める。このCis音は、(G)の最後の音であると同時に、間奏の最初の音でもあり、fとする。
- ・ [12] 下声は、7拍めのE音に上声同様cresc. で納める。このE音は、上声同様(T)の最後の音であると同時に間奏の最初の音であり、fとする。
- [12] ~ [14] ・ 両声とも、6拍分を一塊として、階段状に、fからpへdim. していく。
- [14] ~ [16] ・ [5] ~ [6] に準じ、mfとmpで、(T)の断片とその受けで対比させる。
- [16] ~ [17] ・ [6] ~ [7] に準じ、mfとmpで、会話させる。
- [18] ~ [21] ・ [18] 下声に、Codaとして(T)がmfで出る。[19] で、納めることなく、[20] の(T)の断片につなげる。
- ・ [18] 上声は、下声の(T)に対する(G)が、mfで出る。[19] 上声は、3拍ずつの塊で、少しcresc. しながら、八分音符を刻む。
- ・ [20] は、両声とも、堂々と(T)と(G)の断片を奏し、[21] にcresc. でもっていく。
- ・ [21] は、両声とも、少しテンポをゆるめ、音量を下げることなく、カデンツを奏し、10拍めのA音に納める。

お わ り に

「Inventio 12」は、「Inventio 5」と同様フーガ的作品である。「Inventio 5」の硬質な魅力に対し、「Inventio 12」は、軽快で明朗な美しさを感じさせる。構成的には、両曲とも均整がとれ、整然としていくところが共通しているのに対し、醸し出される音楽的魅力が、対照的であるところが興味深い。

参考文献・参考楽譜・参考 CD

* 参考文献

市田儀一郎 1983年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(音楽之友社)

山崎孝 1984年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(ムジカノーヴァ)

* 参考楽譜

Johann Sebastian Bach 「Klavierbuchlein für Wilhelm Friedemann Bach」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1979)

BACH 「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1972)

J. S. BACH 「Inventionen Sinfonien」Urtext (G. Henle Verlag, München 1978)

J. S. Bach 「Inventionen und Sinfonien」Urtext (Musikverlag Ges. m.b. H & Co., K. G., Wien 1973)

BACH 「INVENTIONEN UND SINFONIEN」Urtext (Edition Peters, Berlin 1933)

Johann Sebastian Bach 「TWO-and THREE-PART INVENTIONS」Facsimile of the Autograph Manuscript (Dover Publications, Inc., New York 1978)

Johann Sebastian BACH 「TWO-PART INVENTIONS」Hans Bischoff (Belwin Mills Publishing Corp. N.Y.)

J. S. BACH 「15 INVENTIONEN」Hans Bischoff (Steingraber Verlag, Offenbach)

BACH 「TOW-and Three-Part Inventions」Ferruccio Busoni (G. Schirmer, New York 1967)

BACH 「INVENZIONI A DUE VOCI」Alfredo Casella (Editioni Curci, Milano 1982)

J. S. BACH 「Inventions a 2 et 3 voix」Durand S. A. (Editions Musicales, Paris 1957)

J. S. BACH 「ZWEISTIMMIGE INVENTIONEN」Edwin Fischer (Wilhelm Hansen, Musik-Forag, Copenhagen 1954)

JOH. SEB. BACH 「15 Zweistimmige Inventionen」Alfred Kreutz (Edition Schott, Mainz 1916)

BACH 「DVOUHLASE INVENCE A TRIHLASE SINFONIE」Vilem Kurz (Editio Supraphon, Praha 1981)

BACH 「15 INVENZIONI A 2 VOCI」Gino Enrico Moroni (Carisch S. p. A. Milano 1944)

BACH 「INVENZIONI A DUE VOCI」Bruno Mugellini (G. Ricordi & C., Milano 1983)

JOH. SEB. BACH 「ZWEI-UND DREISTIMMIGE INVENTIONEN」Julius Rotgen (Universal Edition, Hungary 1951)

BACH 「THE TWO-PART INVENTIONS」John Thompson (The Willis Music Company, Cincinnati)

長岡敏夫編「バッハ インヴェンションとシンフォニア」原典版(音楽之友社 1965)

角倉一朗校訂「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」原典版(カワイ出版 1983)

全音楽譜出版社出版部編「バッハ インヴェンション」(全音楽譜出版社)

Hans Bischoff 角倉一朗訳「J. S. バッハ インヴェンションとシンフォニア」(全音楽譜出版社 1972)

Ferruccio Busoni 伊藤義雄訳「二声インヴェンション」(Breitkopf & Hartel, Frankfurt 1914)

井口基成「バッハ集 二声部インヴェンション 三声部インヴェンション 小前奏曲・小ワルグ」(春秋社 1983)

千倉八郎編「バッハ インヴェンションとシンフォニア」(日音楽譜出版社 1983)

* 参考 CD

Aldo Ciccolini (Piano) 「J. S. BACH INVENTION」TOCE6601 (TOSHIBA EMI)

Christoph Eschenbach (Piano) 1979 「INVENTION & SINFONIA」F26G20323 (POLYDOR)

Glenn Gould (Piano) 1989 「BACH INVENTIONS & SINFONIAS」28DC5246 (CBS SONY)

Tatyana Nikolayeva (Piano) 1986 「J. S. Bach INVENTIONS AND SINFONIAS」VDC-1079 (VICTOR)

Andras Schiff (Piano) 1985 「J. S. BACH 2 & 3 PART INVENTIONS」FOOL-23100 (POLYDOR)

高橋悠治 (Piano) 1991 「インヴェンションとシンフォニア 他」COCO-7967 (NIPPON COLUMBIA)

田村宏 (Piano) 1989 「J. S. バッハ インヴェンション」CG-3722 (NIPPON COLUMBIA)

Kenneth Gilbert (Cembalo) 1985 「J. S. BACH INVENTIONEN UND SINFONIEN」POCA-2113 (ARCHIV)

Gustav Leonhardt (Cembaro) 1992 「バッハ：インヴェンションとシンフォニア」BVCC-1863 (BMG VICTOR)

Helmut Walcha (Ammer-cembaro) 1961 「J. S. バッハ/2声部のためのインヴェンション & 3声部のためのシンフォニア」TOCE-7231 (TOSHIBA EMI)